

速報展

発掘された鈴鹿 2006

2007/03/24 ~ 2007/07/08

無料 Take Free

寺山遺跡 稻荷山古墳 平田遺跡
 国分北遺跡 富士遺跡 西川遺跡
 伊勢国府跡 境谷遺跡 南山遺跡
 保子里8号墳 保子里遺跡



境谷遺跡発掘調査 航空写真

はじめに

06年は11遺跡（16調査区）で発掘調査が行われ、さまざまな成果がありました。

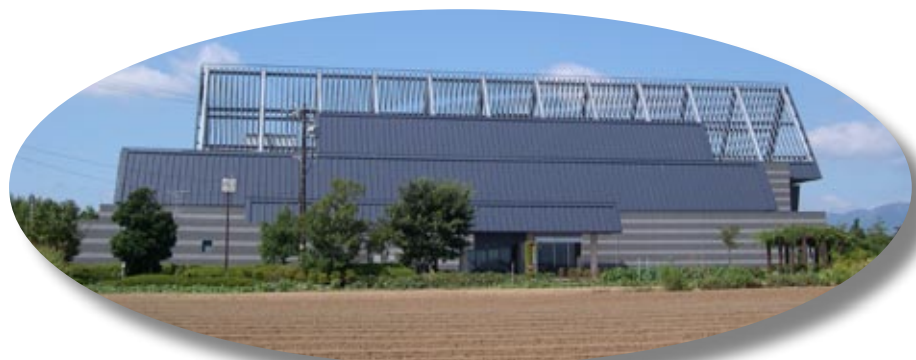
境谷遺跡（国分町）では約8千㎡もの面積が調査され、弥生・古墳時代の大規模な集落が発見されています。遺跡からは石でできた矢じりの他、石庖丁（稲の穂先を摘み取る道具）や土器、竈などが見つかりました。狩りや稲作をして生きる先人の姿が脳裡に浮かんでくるようです。埋蔵文化財は、遠い祖先の暮らしを今に伝える大切な財産なのです。

境谷遺跡の調査を含め、06年に鈴鹿市内で行われた調査はほとんどが「緊急発掘調査」です。これは開発などにより遺跡が破壊される恐れがある場合に、遺跡の情報を記録・保存するため行われる調査です。つまり、発掘調査によってさまざまな遺構や遺物が明らかになる一方で、その遺跡が姿を消してしまうのもまた事実です。

私たちにできるせめてものことは、遺跡を壊す前に発掘調査を行い、記録として後世に残すことです。こうしたことから、当館は発掘調査の成果を速やかに皆さまに公開するために、速報展を開催して参りました。この展示を通して、埋蔵文化財保護の取り組みについて、より深い御理解をいただければ幸いです。

鈴鹿市考古博物館

07年3月



鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology

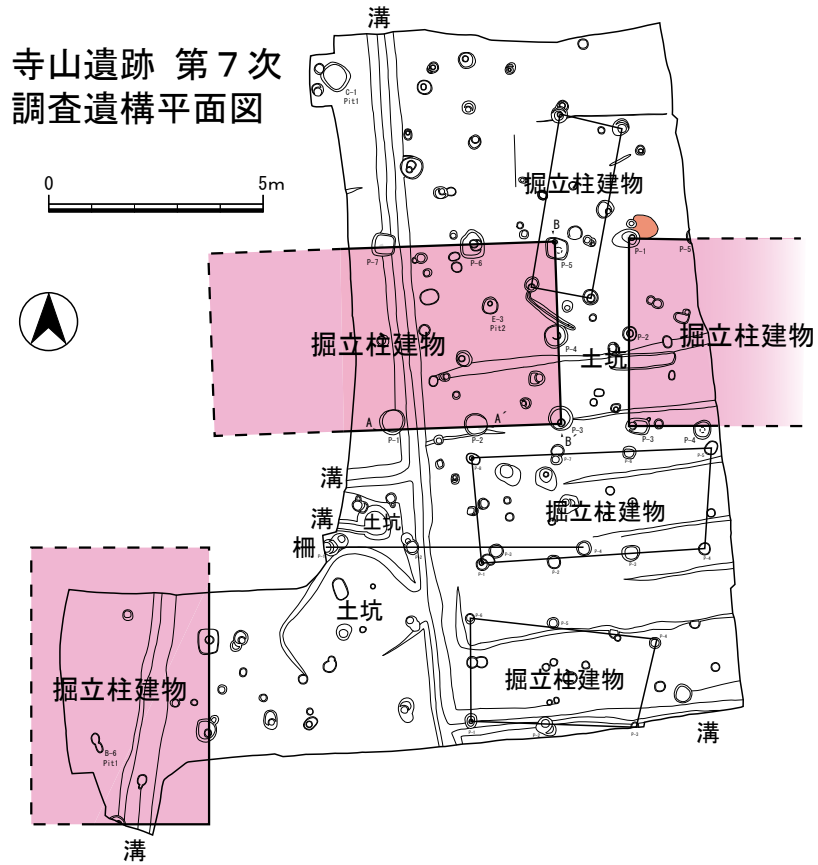
〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224
 TEL 059-374-1994 FAX 059-374-0986
 E-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
 URL: http://www.educity.suzuka.mie.jp/museum/

寺山遺跡 第7次

2月2日～2月23日
福祉施設建設に伴う緊急調査
高岡町字寺山

寺山遺跡は鈴鹿川左岸の標高約50mの台地上にあります。これまでの調査で、弥生時代中期・飛鳥・奈良時代の集落や古墳があったことがわかっています。

今回の調査では、弥生時代中期の竪穴住居や古代の掘立柱建物・土坑などが確認されました。掘立柱建物のうち3棟は、L字型に並んでいたと考えられます。このような計画性から、普通の住居ではなかったようです。しかし、出土遺物や周辺の状況から判断して、役所や官庁などの公的な建物



発掘調査風景

だったとも思えません。そのため、現段階では有力者の居宅ではないかと考えています。出土遺物が細かい破片のため、いつ頃建てられたのかははっきりしませんが、少なくとも平安時代前期以前の建物だと思われます。遺物は石鏃・弥生土器・土師器・須恵器・瓦などが出土しました。

西川遺跡 第2次

6月5日～8月31日
宅地造成に伴う緊急調査
郡山町字野口

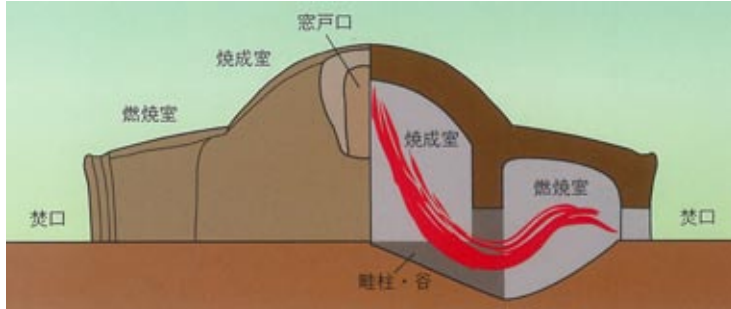
西川遺跡は中ノ川右岸の台地上の奥まった場所にあります。調査区のある地域は「カワラヤマ」と呼ばれ、現在も瓦の破片が落ちています。今回の調査では「カワラヤマ」という名の由来となったと考えられる近世の瓦窯の他、掘立柱建物や竪穴住居、土坑などが確認されました。

瓦窯は江戸時代後期の達磨窯が3基見つかりました。達磨窯は16世紀頃に登場した窯で、中央に焼成室、その両側に焚口と燃焼室があります。達磨が座禅しているように見えることから、その名が付いたと言われています。3基のうち1基は壊され、瓦や



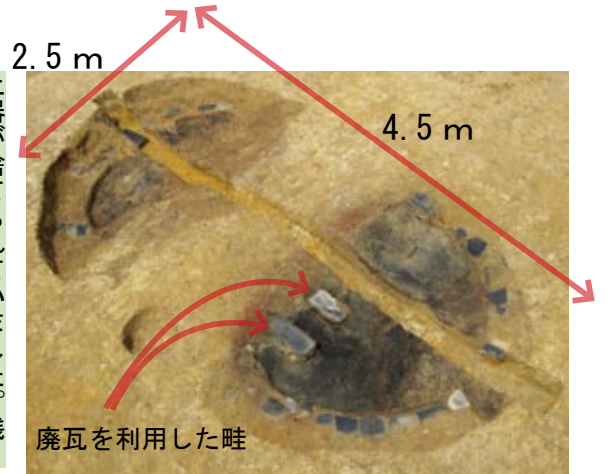
小林栄子瓦窯 (桑名市多度町)

桑名市教育委員会「小林栄子瓦窯実測調査報告」より転載



達磨窯の構造図

(財)京都市埋蔵文化財研究所「つちの中の京都3」より転載



最も残りの良い達磨窯 (江戸後期)



土坑から出土した山茶碗

今回の調査で特筆すべきは、瓦を生産した達磨窯の跡が見つかったことです。時代は近世と新しいものですが、郷土の産業史を考える上で貴重な資料であると言えます。

土器が捨てられていました。残りの2基も地上部分が大きく失われていましたが、形の特徴から達磨窯であることがわかりました。窯体には不用になった瓦が利用されていました。焚口や瓦で造った4本の畦も確認されています。窯周辺からは軒丸瓦、棧瓦などが出土しました。調査区西側では、直径1～3mの土坑が密集するように100基以上見つかりました。何のために掘ったのでしょうか。



密集する土坑 (平安末～鎌倉)

総柱建物の内部の柱には床を支える役目があり、倉庫として使用されていたようです。これらの掘立柱建物は役所の建物のように規則的に並んでいません。しかし、側柱建物の中には格式の高い建物に見られる廂を持つものがあります。やや大きめの倉庫も伴っています。さらに土坑からは円面硯(円形の硯)2点も出土しています。これらのことから判断して、この掘立柱建物の住人は奄芸郡家(古代の奄芸郡の役所)に勤めた役人か、あるいは徳居窯跡群で須恵器生産に携わった有力者ではないかと考えています。



廂付掘立柱建物 (奈良～平安)

富士遺跡 第2次

6月3日～6月21日
集合住宅建築に伴う緊急調査
国府町字富士

富士遺跡は鈴鹿川右岸の台地上にあり、弥生時代～鎌倉時代の遺跡として知られています。過去に今回の調査地から北に約150mの地点で発掘調査が行われ、弥生時代の方形周溝墓などが見つかりました。今回の調査では、竪穴住居・溝・土壇墓・炉・土坑・柱穴が確認されました。

土壇墓は飛鳥時代前半のものが1基見つかりました。土坑の北側に偏った状態で、完全な形の須恵器坏蓋・坏身が2セットと刀子(鉄製の小刀)1点が出土しました。竪穴住居は、奈良時代のもものが3棟見つかりました。うち2棟は重複していて、古い方の竪穴住居は新しい竪穴住居によって大部分が失われていました。両方の竪穴住居で、竈が確認されました。



土壇墓 (飛鳥時代前半)



竪穴住居 (奈良時代)

また、炉が調査区北東で見つかりました。北側半分が失われていて、全体の形はわかりません。深さは約30cmで、底から10cm上に黄褐色の粘土が見られ、その上に堆積している砂質層が暗赤褐色の焼土面となっていました。さらに上層には焼土塊や炭化物・鉄滓などが含まれていて、その中で鑄型の破片が確認されました。鑄型には文様が刻まれたものがあります。何を製作していたのかはわかりませんが、現段階では、概ね古代の遺構であると判断しています。



炉 (古代)



須恵器坏蓋・坏身 出土状況

出土遺物の大部分は竪穴住居からのもので、その他には土坑から須恵器坏が、溝から山茶碗などが出土しました。出土遺物の多くは古代のものであるため、当遺跡の中心は飛鳥～奈良時代であったと言えます。富士遺跡のある国府町は、伊勢国府の移転先として有力な候補地です。そのような地に鑄型を用いる工房があったということから、当遺跡は一般の集落址ではなく、伊勢国府に関連した公的な性格を持った遺跡だったと考えられます。

稲荷山古墳

2月23日～3月22日
駐車場・仮設物置建築に伴う緊急調査
石薬師町字南山

稲荷山古墳は鈴鹿川中流左岸の台地上にあります。調査前には1mほどの高まりが9m×9mの範囲で見られましたが、古墳の形状はわかりませんでした。

今回の調査の結果、幅2mほどの溝が古墳の周囲に掘られていることが確認され、これにより稲荷山古墳が一辺約9.7mの方墳であることがわかりました。古墳墳丘の盛土は、部分的に黒色土と黄褐色土が交互に盛られていました。しかし、破壊されている部分も多く、遺存状況はよくありません。墳丘中央部では墓壇(墓穴)が確認されました。内部には木棺の痕跡がありました。稲荷山古墳の埋葬施設は石を積み上げて造った部屋(石室)などはなく、ただ穴を掘って木棺を置いて埋めた木棺です。



検出された墓壇 (墓穴)



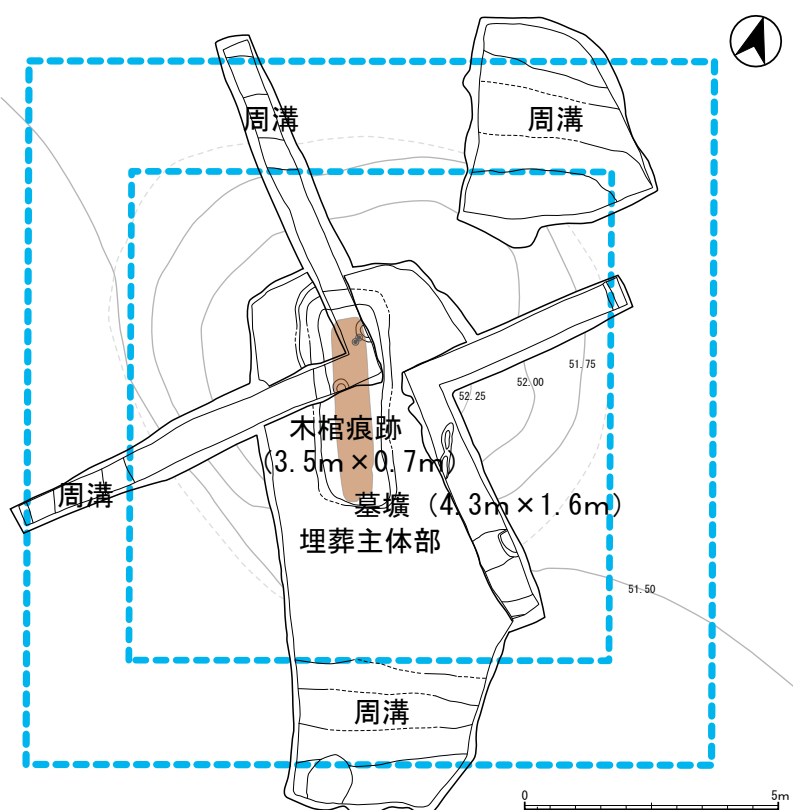
北東角 周溝検出状況 (西から)

直葬と呼ばれる形式のものです。木棺の痕跡内からは須恵器坏蓋・平瓶が並んで出土しました。この2点は埋葬時の位置を保っていると考えられます。他にも須恵器坏蓋が調査後の埋め戻し・墳丘削平時に出土しています。これらの須恵器は7世紀後半の土器であると思われるため、古墳もこの時期に造られたと考えられます。



須恵器坏蓋・平瓶

全国的に見て、7世紀後半とは古墳がだんだん造られなくなる終末期にあたります。この時期の古墳には、距離を保ち、単独で立地する傾向があります。横穴式石室を持つ方墳の深溝狐塚古墳・北野古墳・蛸田古墳などが、その代表的な例です。稲荷山古墳も、この地域における最終段階の古墳であると考えられます。



遺構配置図及び周溝復元図

平田遺跡 第11次

3月31日～4月26日
個人住宅建築に伴う緊急調査
弓削一丁目

平田遺跡は鈴鹿川右岸の標高約22mの台地上にある弥生～戦国時代の遺跡です。宅地造成工事に伴い、04年から御門垣内地区にて発掘調査が開始されました。05年には、新たに西弓削地区でも調査が行われています。06年は、第11～16次調査が行われました。第11次調査は調査区が2ヶ所に分かれます。

《第11-①次調査》
竪穴住居・掘立柱建物・柵・

土坑が見つかりました。
《第11-②次調査》
掘立柱建物・溝・井戸が確認されました。

穴を溝状に掘り（布掘り）、柱を据える部分をやや深く掘り込む建て方の掘立柱建物が見つっています。南北約5.3m×東西3.0m以上の規模になります。

井戸は安全面を考慮し、途中まで掘りました。第9次調査で見つかった井戸は深さが2mを超えており、この井戸も同じくらいの深さがあると思われます。井戸からは常滑焼の破片が多数出土しました。

また、第11-①・②次両調査区域にまたがって、桁行5間（7m）×梁行2間（4.5m）の掘立柱建物



掘立柱建物（飛鳥～奈良時代）

が確認されました。柱の掘り方は一辺が50～80cm前後の隅丸方形です。柱の掘り方内には、はっきりと柱の痕跡が見られるものもありました。

平田遺跡 第12次

3月31日～5月9日
個人住宅建築に伴う緊急調査
平田本町一丁目

第12次調査も調査区が2ヶ所に分かれます。

《第12-①次調査》
掘立柱建物・溝・土坑・柱穴が確認されました。

掘立柱建物は第1・2次調査で見つかった建物の続きです。桁行9間×梁行3間で、東西に長い面、扉付掘立柱建物と棟方向が揃い、さらに東西の規模もほぼ同じになると思われるため、計画的に

建てられたと考えられます。溝は幅70～90cm、深さ30～40cmで、南西から北東へまっすぐ続きます。この溝は古代の道路遺構の西側溝にあたり、これまでの調査で幅約9mの道路が80mにわたって確認されています。

調査区の南辺では3基の土坑が確認されました。うち一基からは重弧文軒平瓦が出土しています。平田遺跡では多数の瓦が見つっています。軒瓦は2点しか出土していません。

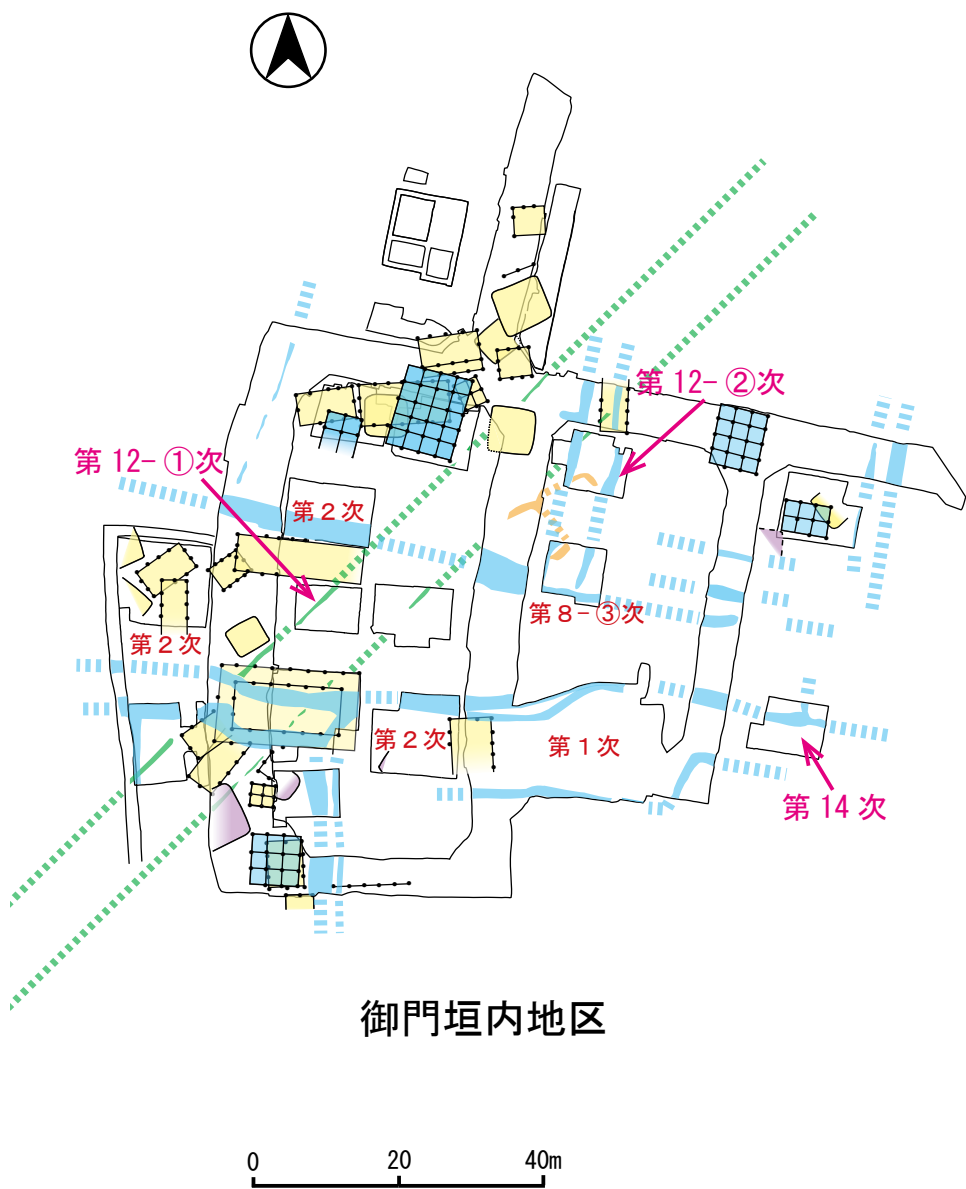
《第12-②次調査》
方形周溝墓・溝・柱穴が確認されました。



道路の側溝（古代）

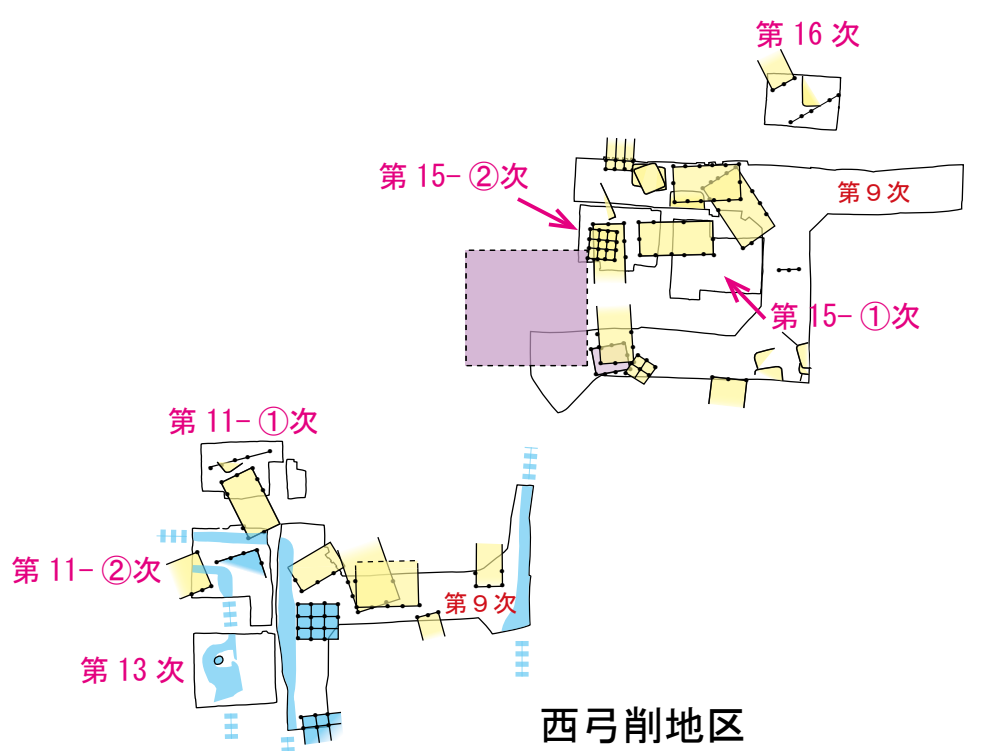
で弥生時代末の方形周溝墓が1基確認されています。南北溝2条は第1次調査で検出されたものの続きで、第8-③次調査区へ繋がります。中世の屋敷地を区画する溝だと考えられます。

- 弥生時代の遺構（方形周溝墓）
- 古墳時代の遺構（古墳・竪穴住居・掘立柱建物）
- 古代の遺構（竪穴住居・掘立柱建物）
- 古代の遺構（道路）
- 中世の遺構（掘立柱建物・溝）



御門垣内地区

0 20 40m



西弓削地区

平田遺跡遺構配置図

平田遺跡 第13次

5月12日～5月31日
個人住宅建築に伴う緊急調査
弓削一丁目

溝・井戸・柱穴が確認されました。
北から南へと続く溝は第11②次調査で確認されたものの続きです。途中で枝分かれし、井戸の周りを巡るように掘られています。遺物から、これらの溝や井戸は室町時代には埋まってしまったと考えられます。
調査区北部では飛鳥～平安時代のものと思われる柱穴が見つかりました。



井戸とその周りを巡る溝

平田遺跡 第14次

7月3日～7月14日
個人住宅建築に伴う緊急調査
平田本町一丁目

平田遺跡には、御門垣内古墳として遺跡地図に登録されていた古墳がありました。しかし第1次調査の結果、古墳ではなく中世の土塁であることが判明しました。第14次調査区はこの土塁の東にあります。調査の結果、溝・土坑・柱穴が確認されました。
溝は第1次調査で見つかったものの続きです。この溝は土塁の北側に掘られており、さらに東へと続くことがわかりました。
調査区南西部で見つかった土



第14次調査区全景

平田遺跡 第15次

10月4日～10月23日
個人住宅建築に伴う緊急調査
弓削一丁目

第15次調査も調査区が2ヶ所に分かれます。
《第15①次調査》
道路部分の調査で見つかった掘立柱建物の続きが確認されました。桁行5間×梁行4間の規模で南北に長くなります。
調査区南西部で見つかった土坑は1.8m以上×1.3mの規模で、床面などの土が熱を受けて赤褐色に変色していました。土器を焼くために使用されたと思われる。
《第15②次調査》
調査区南西部で見つかったL字状に曲がる溝は、第9次調査で確認された古墳周溝の延長にあたります。第9次調査の成果と合わせると、南北規模は内法で約16mになり、形から方墳であると考えられます。しかし、出土遺物が少ないため、いつ頃造られたのかはわかりません。
古墳周溝に沿うように掘られた1.5m×0.5mの長方形の土坑の西隅



須恵器坏蓋出土状況



L字状に並ぶ2棟の掘立柱建物（平安時代）

平田遺跡 第16次

11月7日～11月18日
個人住宅建築に伴う緊急調査
弓削一丁目

調査の結果、竪穴住居・掘立柱建物・土坑・柱穴・溝が確認されました。
掘立柱建物は東西2間分が確認されています。
調査区南西部で見つかった土坑から、土師器・須恵器などの土器類と一緒に埴輪の破片が出土しました。第9・15次調査で古墳の周溝が確認されていましたが、これまで埴輪が見つかったことはありませんでした。この埴輪片は第9・15次調査で確認された古墳に使用されていた可能性がります。



第16次調査区全景

からは、ほぼ完全な形の須恵器坏蓋が出土しています。その形などから墓である可能性がります。
また、掘立柱建物が2棟重複して見つかりました。柱穴は重複していないため、どちらが先に建てられたのかはわかりません。うち1棟は東西3間×南北3間の倉庫でした。
第15①・②次調査で、桁行5間×梁行2間の東西に長い建物と桁行3間以上×梁行2間の南北に長

い建物が確認されました。この2棟の北辺はほぼ一直線上に並び、さらに後者の建物の南には第9次調査で見つかった掘立柱建物が並びます。つまり3棟がL字状に配置されていたと思われるのです。このような計画的な建物配置は、普通の集落では見られません。役所など公的な施設や郡司などこの地の有力者の居宅であった可能性がります。出土遺物から平安時代の建物群と考えられます。

伊勢国府跡 第21次

7月19日～9月8日

学術調査
広瀬町字西野

伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）は安楽川左岸の標高約50mの台地上にあり、鈴鹿市広瀬町・西富田町、亀山市能褒野町・田村町にまたがる遺跡です。鈴鹿市は平成4年度から継続して学術調査を行ってきました。ここ数年は北方に広がる官衙（役所・行政施設）推定地の範囲確定を目的に調査が行われてきました。その結果、区画溝が確認され、方格地割は東西に4区画、南北に3区画はあることが明らかにされています。

今回は引き続き北方官衙の北限確認を目的とし、東西溝と南北溝の交点と推定される場所を調査地に選定しました。

調査を行ったところ、幅1mの東西溝が確認されました。断面は逆台形をしています。瓦2点が出土しました。調査区の外へ続いた溝の続きと考えられます。また、この溝の東側でも東西溝が確認されました。一端途切れていますが、この2条の溝は本来は1本の溝だったと思われる。

また、幅約1mの南北溝も確認されました。東西溝との交点が膨らんでおり、そこから比較的大型の瓦がまとまって出土しました。そして、その西側でも南北溝が見つかっています。幅は最大で1.6m

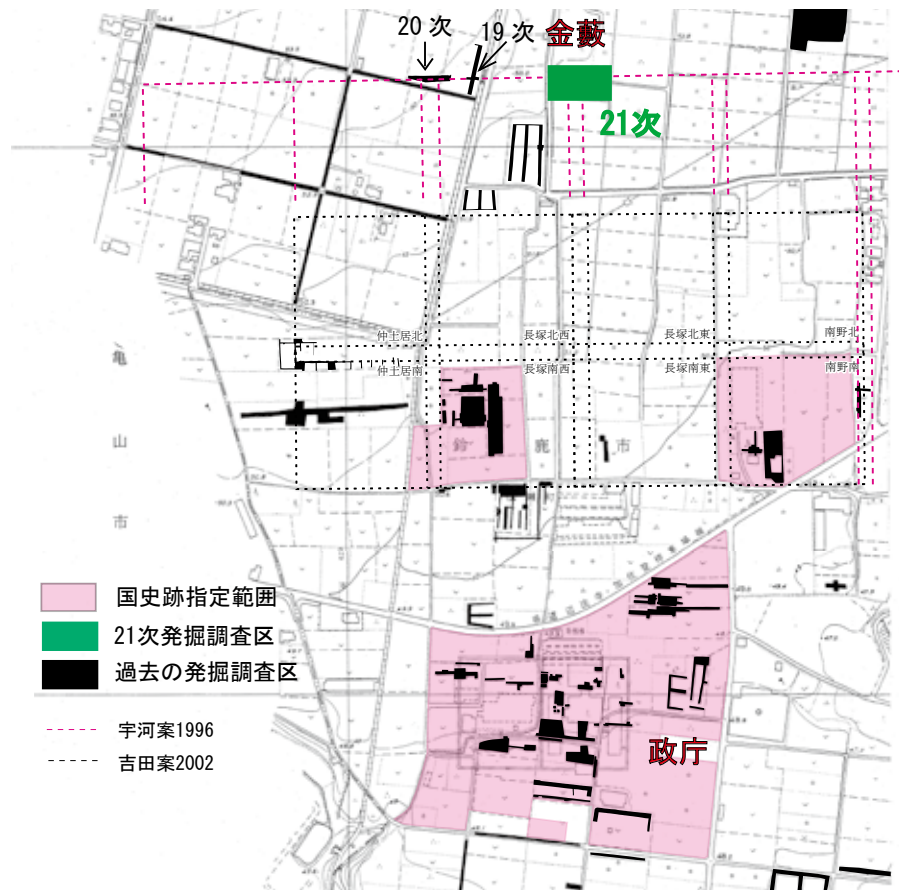
ありました。途中が途切れていました。その他、大型の土坑が確認されました。東西約4m、南北約8.5m程ですが、調査区外へと続くため正確な形はわかりません。比較的に残りの良い瓦が出土しました。

今回の調査では、調査前に予想した通りの場所から東西溝が見つかりました。また、予想とはやや異なる場所でしたが、南北溝も2条平行して見つかりました。

南北溝の軸線上で発掘調査が行われたことは今までなく、他の調査成果などから幅12mの道路が見つかると予想されていました。しかし、今回見つかった2条の南北溝の間は24mもあり、つまり道路幅が予想の2倍もあることがわか

りました。この大路は政庁から真北に延びており、伊勢国府の中心軸である可能性が考えられます。また、その延長には長者伝説の由来となった通称「金藪」と呼ばれる森が存在するため、そこに何らかの施設があった可能性も出てきました。

北方官衙北限の調査をここ数年行ってきましたが、北方官衙を区画すると言われてきた溝からは、これまでほとんど遺物が出土しませんでした。そのため、本当に区画溝であるのかどうか、慎重な意見もありました。しかし、今回の調査では多くの遺物が出土し、少なくともこの溝が古代に機能していたことが確認されました。このことから、他の調査区で区画溝と報告されている遺構も同じ時期のものである可能性が高くなり、古代、この地域に計画的な地区割りがあったと考えることができるようになります。



伊勢国府跡 発掘調査区配置図



東西溝から出土した瓦



東西溝検出状況（西から）



東西溝・南北溝検出状況（北から）

北方官衙北限の調査をここ数年行ってきましたが、北方官衙を区画すると言われてきた溝からは、これまでほとんど遺物が出土しませんでした。そのため、本当に区画溝であるのかどうか、慎重な意見もありました。しかし、今回の調査では多くの遺物が出土し、少なくともこの溝が古代に機能していたことが確認されました。このことから、他の調査区で区画溝と報告されている遺構も同じ時期のものである可能性が高くなり、古代、この地域に計画的な地区割りがあったと考えることができるようになります。

保子里遺跡 第5次

12月12日～12月27日

保育所建設に伴う緊急調査
国府町字井口

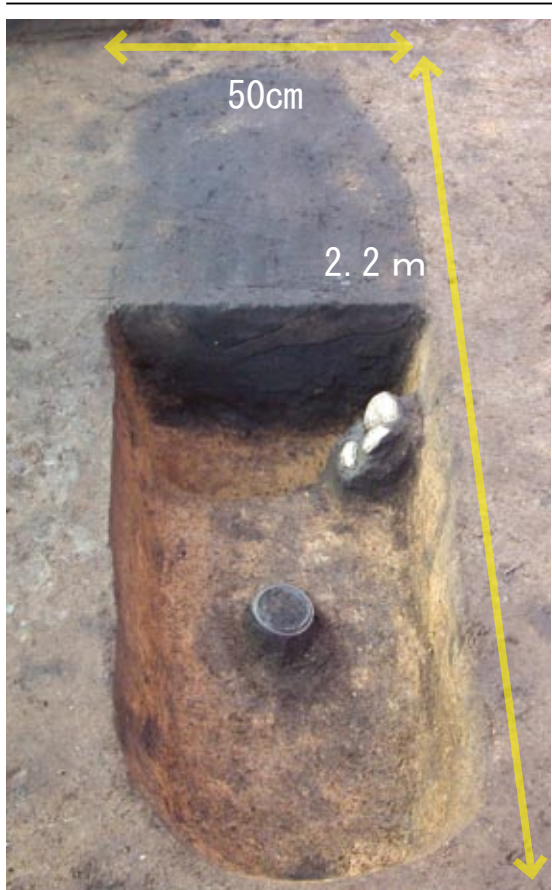
保子里遺跡は鈴鹿川右岸の台地上にあります。周辺には、保子里古墳群が群集しています。今回の調査の結果、古墳の周溝・土壙墓・溝・土坑・柱穴などが確認されました。

土壙墓は2基見つかりました。うち1基は、東西方向に長い隅丸長方形の形をしています。7世紀前半頃のものと思われる須恵器坏蓋・坏身が出土しました。もう1基の土壙墓も、隅丸長方形の形です。遺物が1点も出土しなかったため、造られた時期や性格についてはわかりません。しかし、周辺での検出例などから、7世紀前半頃の土壙墓と考えられます。

今回、周溝が見つかった古墳は新発見の古墳だったので、保子里19号墳と命名されました。周溝からは、6世紀初頭～前半の土師器

の破片が出土しました。19号墳は、8号墳と同時期の6世紀前半に築造されているようです。

このように、この辺りでは古墳時代後期に多くの古墳が築造されていく様子が明らかになってきました。これらの古墳は、おそらく保子里遺跡で生活していた人々によって築かれたものでしょう。また、7世紀代のものと思われる土壙墓も見つかっていることから、保子里遺跡では古墳が造られなくなった後も土壙墓が群集して造られ、墓域としての機能が飛鳥時代まで続いたと考えられます。



半分だけ掘られた土壙墓



保子里 19号墳の周溝

境谷遺跡

8月7日～12月22日
 公共施設建設に伴う緊急調査
 国分町字境谷



円形竪穴住居（弥生時代）

境谷遺跡は鈴鹿川左岸の台地上にあり、弥生・古墳時代の遺跡として知られていました。しかし、山林となっていた当遺跡は長い間調査されることもなく、詳しいことは分かっていませんでした。今回、約8千㎡という広範囲を調査した結果、弥生時代・古墳・奈良時代の遺構や遺物が見つかりました。

弥生時代の遺構としては、竪穴住居と土坑が確認されました。竪穴住居には円形と方形の2種類があり、全部で34棟見つかりました。円形住居は柱などが焼け落ちた状態で炭が敷き詰められています。焼けた原因は失火もしくは焼祭（住居を廃棄する際に）

たマツリ・儀式）で意図的に燃やした可能性が考えられますが、現在のところまだわかりません。弥生時代の土坑は16基確認されており、そこから棄てられたと思われる弥生土器がたくさん見つかりました。遺物は甕・壺などの磨石・石斧・石庖丁などの石器や土玉と思われる土製品も出土しています。



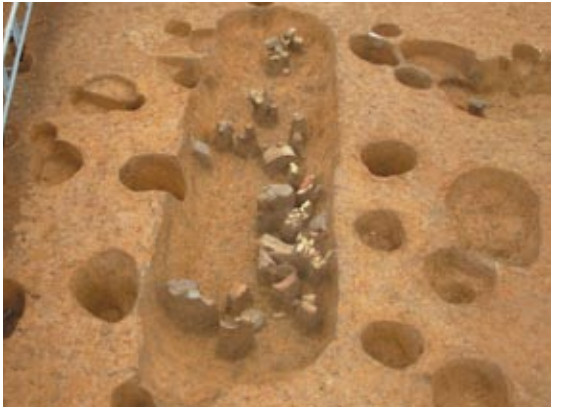
発掘作業風景

古墳時代の遺構は、竪穴住居と土坑が確認されました。竪穴住居は30棟以上見つかり、方形のものを中心とす。弥生時代に住居の中央部にあった炉の代わりに、古墳時代後期には住居の壁際に竈が作られるようになりまし

た。土坑は13基見つかりました。弥生時代のものに比べると大型になり、形が整っています。遺物は土師器（甕・壺・高坏・甑）、須恵器（甕・壺・坏身・坏蓋）の他、砥石や刀子（鉄製の小刀）が出土しました。

飛鳥・奈良時代の遺構は、掘立柱建物が30棟見つかりました。周囲だけに柱を巡らせる側柱建物と、建物内部にも柱を持つ総柱建物の2種類が確認されています。

今回の発掘調査の結果、弥生時代中期と古墳時代後期・奈良時代にかけての鈴鹿川左岸の集落の様相を考えると良好な資料を得ることができました。



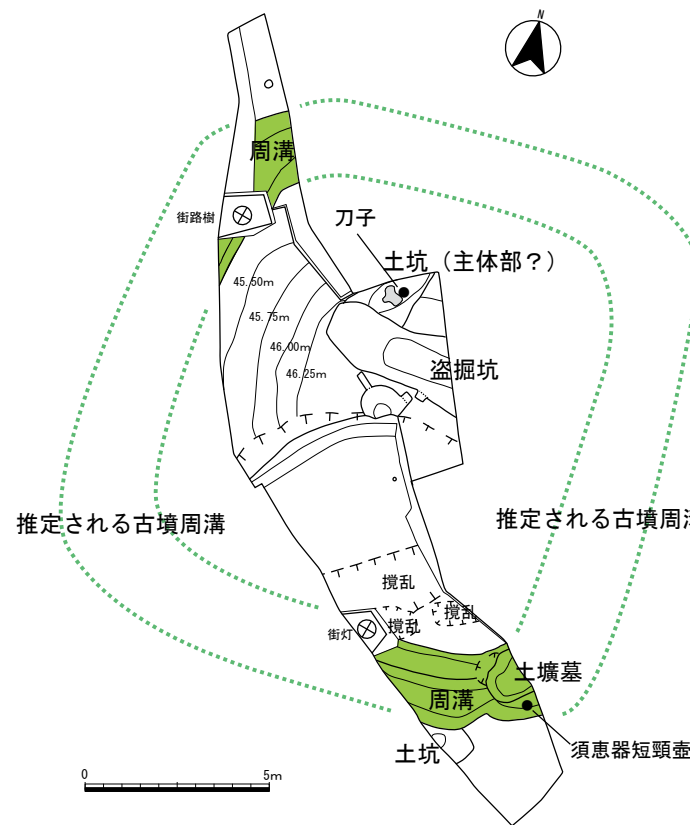
土坑の遺物出土状況

居は30棟以上見つかり、方形のものを中心とす。弥生時代に住居の中央部にあった炉の代わりに、古墳時代後期には住居の壁際に竈が作られるようになりまし

た。土坑は13基見つかりました。弥生時代のものに比べると大型になり、形が整っています。遺物は土師器（甕・壺・高坏・甑）、須恵器（甕・壺・坏身・坏蓋）の他、砥石や刀子（鉄製の小刀）が出土しました。



掘立柱建物（古代）



遺構配置図及び周溝復元図

保子里8号墳は鈴鹿川右岸の台地上にあります。周辺の保子里古墳群には戦前、28基もの古墳があったと伝えられていますが、今では10基程しか残っていません。現在残っている古墳の多くは円墳ですが、前方後円墳や方墳、双円墳など様々なものがあります。中でも車塚とも大塚とも呼ばれている保子里1号墳は明治32年に発掘調査が行われ、垂飾付耳飾・鏡・台付銅鏡・鉄刀・装身具など豪華な副葬品が出土したことで有名です。遺物から、6世紀前半に造られた古墳だと考えられています。周りの古墳もほとんどがこの頃に造られたと推定されています。

今回の調査では、調査区の北と南の2カ所で周溝が確認されました。南側の周溝は幅約2mで、断面は浅い楕円状をしています。また、途中で折れ曲がり、向きを変えていることがわかりました。完全な形の須恵器短頸壺が1点出土しています。北側の周溝も幅約2mで、調査範囲が狭いため詳しくは分かりませんが、南側の周溝と同じく途中で折れ曲がって向きを変えているようです。遺物は出土していませんでした。

埋葬施設（主体部）は、古墳の頂上から真下に約1m掘り込んで造っていたようです。しかし木棺などの痕跡がなく、一度に埋まっている土の状況から、過去に盗掘にあっている可能性もあります。須恵器坏蓋1点、土師器甕の破片3点が出土しました。

保子里8号墳はこれまで円墳と考えられてきました。しかし今回の調査の結果、方墳である可能性が高くなってきました。また遺物から、6世紀前半に造られた古墳であることもわかりました。

保子里8号墳

10月23日～11月30日
 病院進入道路改良工事に伴う緊急調査
 国府町字井口



周溝と土坑墓の断面

今回の調査では、調査区の北と南の2カ所で周溝が確認されました。南側の周溝は幅約2mで、断面は浅い楕円状をしています。また、途中で折れ曲がり、向きを変えていることがわかりました。完全な形の須恵器短頸壺が1点出土しています。北側の周溝も幅約2mで、調査範囲が狭いため詳しくは分かりませんが、南側の周溝と同じく途中で折れ曲がって向きを変えているようです。遺物は出土していませんでした。



盗掘坑の断面



出土した須恵器短頸壺

国分北遺跡 第4次

5月1日～5月25日
工場建築に伴う緊急調査
国分町字野田

国分北遺跡は、通称国分台地と呼ばれる鈴鹿川左岸の台地上にあります。国分台地には奈良時代に伊勢国分僧寺・尼寺が置かれ、周囲には関連の遺跡が多くあります。国分北遺跡は、国分尼寺推定地である現在の国分集落（国分遺跡）の北側に広がる平坦地一帯に所在します。

これまでの調査では、平安時代中期以降の掘立柱建物13棟、中世の掘立柱建物1棟、道路状遺構が見つかっています。今回の調査の



結果、土坑・溝・柱穴が確認されました。

西から東に流れる溝3条は、近世の近代の陶器片が出土することから、埋め立て直前まで利用されていた水田に伴う溝であると考えられます。また、溝に棄てられていた瓦の中に、押印瓦が1点含まれていました。平瓦に円形の印が押されていますが、文字が不鮮明で読むことはできません。

柱穴は掘立柱建物あるいは塀に伴うものです。塀に伴う柱穴の一つから灰釉陶器碗が出土しました。しかし、その他は土師器の小片しか見つかっていないため、いつ頃建てられたものかはわかりません。

今回の調査でも、平安時代以降には台地のかなり奥まった部分にも集落が広がっていくということが再確認されました。

検出された溝と柱穴

南山遺跡 第4次

9月19日～10月4日
福祉施設駐車場整備に伴う緊急調査
河田町字南山

南山遺跡は鈴鹿川左岸の台地先端部にあります。この台地の南縁には、古墳時代後期の群集墳とみられる南山古墳群があります。

これまでの調査で、横穴式石室を主体とする円墳（南山6号墳）の他、方形周溝墓2基、弥生時代後期の竪穴住居4棟、環壕が確認されています。

今回は、まず調査区域全域で試掘調査が行われました。しかし



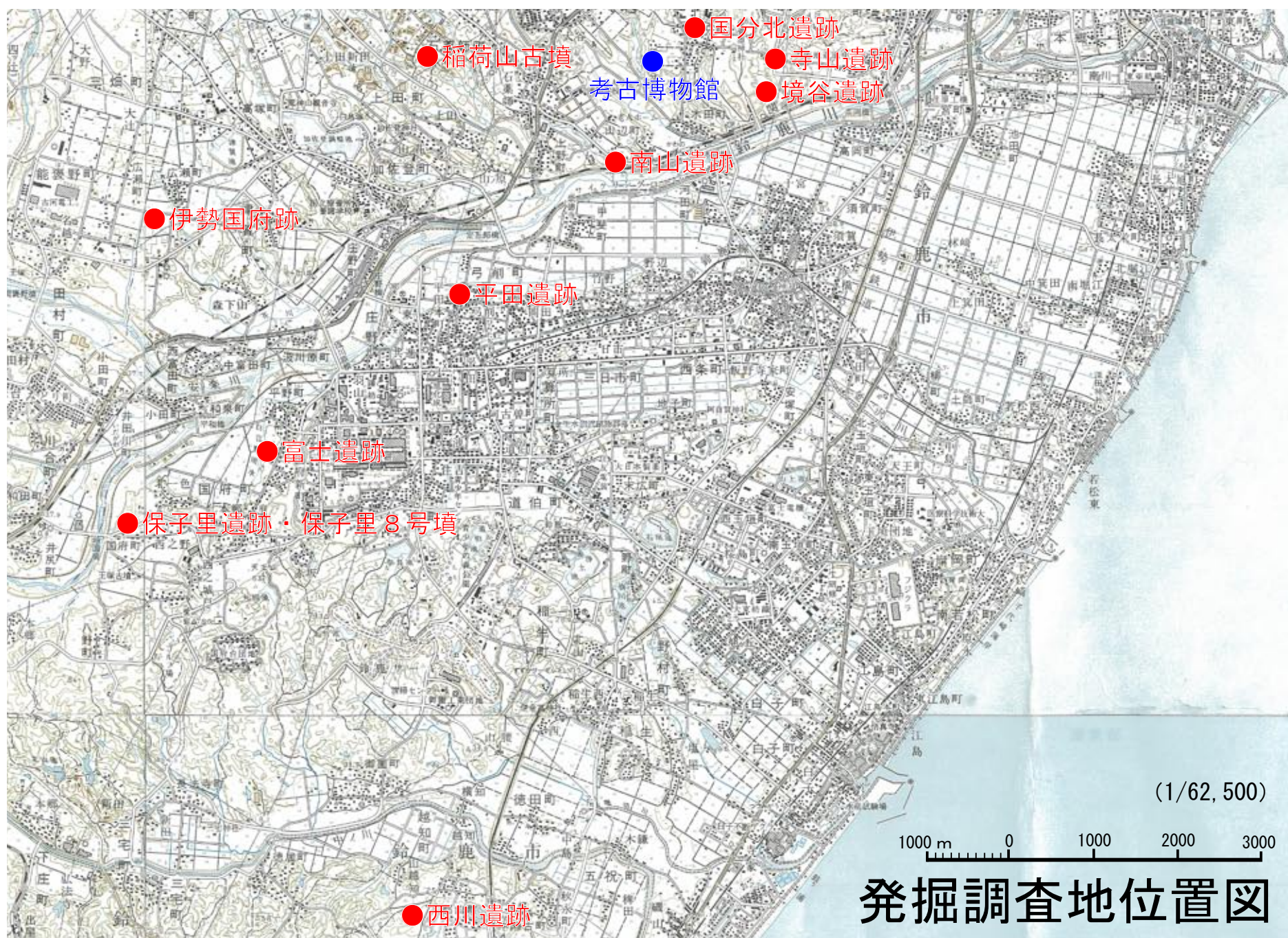
攪乱が著しく、遺物包含層・遺構面は確認されませんでした。唯一、西端部では残りの良さそうな面が見つかり、かつ前回の調査で見つかった環壕の続きが確認できる可能性が高かったため、その範囲約90㎡のみを対象として調査を実施しました。

検出された弥生時代の環壕



その結果、延長約10mの環壕が確認されました。幅は約2.5m、深さは約1mです。ほぼ直線状の溝で、断面はシャープな逆台形状をしていました。数点出土している弥生土器から、この壕が弥生時代後期前半に機能していたと考えられます。

弥生土器出土状況



発掘調査地位置図